

年間第二十七主日

2018.10.7

マルコ 10・2-16

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

今日の福音には、連続するようにして、三つの場面が語られています。最初の場面には、ファリサイ派の人々に問答を挑まれ、それにお答えになるイエスのみことばが響いています。それに続く場面では、家に戻った弟子たちだけに、ファリサイ派の人々に向けて語られたのと同じみことばを語り聴かせるイエスのお姿が示されています。けれども、今日の福音はそこで終わってはいません。今日の福音の最後の場面には、その前の二つの場面とは全く雰囲気異なる、子供たちを抱き上げ祝福してくださる、慈愛に満ちたイエスのお姿が示されています。

今日のミサの中で、今わたしたちが聴いた福音を一まとまりの今日の福音として受け止めるとき、それは、どのようなことをわたしたちに語りかけてくるでしょうか。ファリサイ派の人々との問答と、それに続く弟子たちとの質疑応答のすぐ後に、子供たちに囲まれて祝福を与えるイエスのお姿を示す今日の福音の意図は、どのようなことをわたしたちに語ろうとしているのでしょうか。ファリサイ派の人々との問答における、一切の妥協を許さないイエスの舌鋒の鋭さと、子供たちを抱き上げて祝福してくださるイエスのお姿の間には、弟子たちにとってだけではなく、わたしたちにとっても、にわかには計りがたいイエスをいうお方のお心の振幅の大きさが示されているように感じられないでしょうか。わたしたちが信仰においてそのみ後に従うイエスというお方は、弟子たちにとってそうであったように、わたしたちにとっても、常にその時その時のわたしたちの理解の範囲を越えて、わたしたちを導くわたしたちの主であり続けられるのです。

「子供たちを私のところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることが出来ない。」今日の福音の全体の中で、あらためてこのみことばを味わうとき、わたしたちに馴染み深いこのみことばは、新たな気づきをわたしたちにもたらします。ここでもイエスは神の国について語り、わたしたちをイエスがもたらされた神の国へと招こうとしておられるのです。イエスの神の国の福音は、イエスのみことばによってわたしたちにもたらされています。福音書に記されているイエスの全てのみことばは、

わたしたちがそれを受け入れることによって、イエスがもたらされた神の国に入る事が出来るために語られているのです。ファリサイ派の人々と弟子たちに向けて語られ、わたしたちが今日のミサの中で聴いたみことばもそのようなみことばです。そのように受け止めるなら、今日の福音の前半の、弟子たちにとってだけではなく、わたしたちにとってもあまりにも厳しく思われるみことばについても、イエスは、子供のようになってそれを受け入れる人にならなければ決して神の国に入ることはできないと言われているのです。

イエスの今日のみことばをそのように受け止めなければならぬとすると、わたしたちは暗澹たる思いに突き落とされることになるかもしれません。今日のイエスのみことばは、わたしたちにはあまりにも厳しすぎると言わざると得ない現実の中に多くのわたしたちは生きているからです。わたしたちは、多くの場合、決して子供のようになって、一からやり直すことなど出来ない状況の中に置かれているからです。

けれども、わたしたちの現状がもたらすそのような暗澹たる思いの中で、わたしたちの中から湧き起こってくるイエスのみことばに対する反発を鎮め、弟子たちがそうしたようにイエスのもとに留まって、子供のようになってイエスのみことばの真意を尋ね続けなければなりません。イエスのみことばは弟子たちにとってそうであったようにわたしたちにとっても子供のようになって、そのままそれを受け入れるにはあまりにも厳しく思われるからです。

イエスは、波立つわたしたちの思いを鎮めるように、今のわたしたちの現状がどのようなものになっていようとも、「初めからそうであったのではない」と語りかけ、諭してくださいます。今のわたしたちの現状が、わたしたちにとってどのようなものとなってしまっているとしても、イエスは「初めからそうであったのではない」と言ってくださるのです。このイエスのみことばに導かれて、わたしたちの「初め」に立ち戻る事が出来たらと思います。

今わたしたちがその中に生きている生活には「初め」があったのです。司祭になって四十年以上経ったこの私にも司祭に叙階された日があったのです。結婚されている皆さんにとっても、そのような初めの日があったはずです。司祭としての生涯を生きるにしても、結婚して夫婦の絆に結ばれて人生を歩むにしても、わたしたちはあの初めの日、子供のようになって、あの初めのときから始まった今のわたしたちの現実の全てを受け入れたのです。あのとき、わたしたちは子供のようになって、それと気付かぬままに、神がわたしたちのために用意してくださっていた、「神の国」を受け入れたのです。

今日の福音のイエスのみことばによって、わたしたちはあらためて、今わた

したちがその中に生きる現実が、イエスがわたしたちにもたらそうとしておられる「神の国」の始まりであることを悟ることが出来るのです。そのためにイエスはこの現実を生きるわたしたちに「初めからそうであったのではない」と語りかけてくださるのです。

イエスがわたしたちに指し示してくださる「神の国」はわたしたちが今その中に生きているわたしたちの現実から離れてどこかにあるのではありません。わたしたちが経験したあの初めの日に、わたしたちが子どものようになって受け入れた、今わたしたちが生きている現実の中に「神の国」があるとイエスは言われるのです。子供のように、あの初めの日にわたしたちが受け入れたはずの、今わたしたちがそれを生きているわたしたちの現実の中でわたしたちは十字架のイエスと出会うのです。

十字架の道を行かれるイエスと出会うことによって、そのイエスに教え諭されることによって、わたしたちは自分が生きる今の現実が、神がわたしたちのために用意してくださっていた、イエスに従う十字架の道であることを悟ることが出来るのです。そこに、イエスがわたしたちにもたらしてくださった「神の国」があるのです。イエスがもたらしてくださった「神の国」は十字架の道を行くことによって、わたしたちの前に開かれてくるのです。十字架の道を最後まで歩みとおされたイエスがわたしたちに教えてくださることは、わたしたちが子供ようになって、あの初めの日に受け入れたはずの今のわたしたちの現実の十字架がわたしたちへの神のみ旨であり、それを受け入れ歩みと通すことが「神の国」への道であるということです。

今日、新たにイエスのみことばに促されて、わたしたちの初めの日に戻って、あの初めの日の受け入れたはずの今のわたしたちの現実を、それこそが十字架のイエスに従う「神の国」への道であることを受け入れることが出来る恵みを願いたいと思います。イエスのみことばの恵みによって、わたしたちは幾つになっても初めの日に戻ることが出来るのです。真実わたしたちがあの初めの日に戻ることが出来るなら、その日から始まった今のわたしたちの現実を、十字架のイエスに従う「神の国」への道であると受け止めなおすことが出来るのです。そのような恵み、新たな力を願いあって、十字架のイエスの祭壇のもとで今日のミサをおささげしたいと思います。ここに集うわたしたち一人一人を十字架のイエスが抱き上げてくださり、祝福してくださるよう祈り求めたいと思います。